

令和元年度 奈良市立伏見南幼稚園 研究実践概要

園長名 藤田 香予子

全園児数 27名

1. 研究主題

「いきいきわくわく主体的に遊ぶ子どもを目指して」
 —キラッと輝く子どもの姿を捉えて—

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

子どもがキラッと輝きいきいきわくわく活動する姿を、主体的に活動する姿と捉えた。園生活の中で、“人・もの・こと”に出会う中で、子どもがキラッと輝く瞬間はどのような姿なのか、またその要因を探ることで、環境構成や援助、保育内容等の在り方が分かり、子ども達が主体的に活動する姿に繋がると考えた。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どものキラッと輝く姿の捉えを共有し見取る力を養い、主体的に活動するための保育内容や環境構成、援助の在り方を探る。

②研究の重点

- ・子どもの特性や発達の姿を捉え興味関心を探り、主体的に活動できる援助や保育内容を工夫する。
- ・子どもの言葉や表情、動きなど子どもの心が動く姿を見取り、夢中になって遊ぶための環境構成や援助の在り方を探る。

③活動の方法

【事例1】 4歳児「ダンゴムシ、大好き!!」(5月) 【ダンゴムシについて考える】

(○ねらい 環境構成_____ 援助_____ 心が動く姿_____)

○ダンゴムシの世話をしたり関わったりしながらその存在を感じ大切にしようとする。

4月当初より、植木鉢の下や畑にいるダンゴムシを見つけて捕まえていた。身近に関われるように、大きなダンゴムシ用の飼育スペースを用意すると、子ども達は自分たちで草花を入れたり、石やプリンカップを入れたりして世話をしていた。遠足の日が近づいていたある日、A児が「先生、ダンゴムシも遠足連れていきたい」と保育者に言いに来た。

実現するのは難しいが、ダンゴムシを大事に思っている気持ちを認めたいと考え、何かいい方法をみんなで探すことにした。

心が動く要因と
しての見取り

捕まえることが
楽しい

ダンゴムシが丸まっ
たり、葉っぱを食べ
たりしているのが面
白い

ダンゴムシが可愛い、
大切にしたい

保育者が「ダンゴムシも一緒に遠足に行けたら楽しそうだね。でもダンゴムシは小さいから迷子になったら大変だからどうしようかな…」と問いかけると子ども達も「危ないかも」と納得し「じゃあダンゴムシにお土産持って帰ってきてあげたらいいやん」と口々に話した。そこで、ダンゴムシに持って帰ってくる葉っぱや木の実を入れるためのダンゴムシバックを作成し、後日遠足に行った際にはたくさんのお土産を拾ってきて飼育スペースに入れる姿が見られた。

ダンゴムシのことを考えて、どうしたらいいのか考える

ダンゴムシに喜んでほしい

<反省、評価>

命あるものを身近に感じ、触れ合いながら大切さを感じてほしいと願い、飼育スペースを子ども達と一緒に作った。最初はダンゴムシをおもちゃのように扱っていたが徐々にダンゴムシの世話をしたり、丸くなる様子を見たり楽しむようになった。遠足に連れて行くのは現実的には難しいが、子ども達が毎日関わっているからこそ出てきた言葉で、ダンゴムシが可愛いと思っている気持ちを尊重したいと考えた。生き物を大切にすることを育てるには保育者が子どもの思いをしっかりと受け止めること、子ども達自身が生き物を身近に感じることができ環境を整えることが重要であると感じた。

【事例2】 5歳児 「この虫って何の虫？」(5月) 【もっと知りたい】

(○ねらい 環境構成_____ 援助_____ 心が動く姿_____)

心が動く要因としての見取り

- 友達に自分の思いを言葉で伝え、相手の話に耳を傾けて遊びや生活を進めようとする。
- 自然物や生き物に興味をもち、気づきや発見を楽しむ。

A児とB児が「バッタを見つけたよ」と、嬉しそうに保育者に見せにくる。しかし、バッタと色や形が違っていた。「この虫ってバッタかな？先生の知ってるバッタと少し違うね」と問いかける。すると、A児とB児は、顔を見合わせて、再び捕まえてきた虫を見つめた。そして、A児「あっ、そっか、色が違うんやわ」と言うと、B児も「そうやん。色薄いんちゃう」と、体の色が違うと二人で話し始めた。A児「そしたら、バッタ違うってこと？」B児「先生、何虫か教えて」と話しかけてくる。「先生は、何の虫か分からないな」と、二人の思いを受け止めてから、「絵本の部屋に昆虫の図鑑があったよ」と伝える。A児とB児は、図鑑を絵本の部屋へ取りに行った。

捕まえた嬉しさを伝えたい！！

虫の本当の名前を知りたい！！

A児とB児は図鑑を持ち、保育室へ戻り、虫と図鑑を見比べている。A児「羽が一緒やからクサキリやろ」B児「え～、違うよ。ササキリやろ」と、互いの考えを伝え合っている。二人の姿を見守りながら「ここに大きさとか書いてるよ。虫の長さが分かったら、何の虫か分かるかもしれないね」と、調べる方法を提案し、物差しを渡した。

物差しを使って長さで調べてみたい！

B児「やってみよう」と虫かごから虫を出し、「Aくん、ここ(物差し)持っててや。僕は虫持ってるから」と、A児に伝えた。二人で物差しに虫を置いてみる。A児「どれかな」と、図鑑を調べる。B児「これちゃう。大きさ一緒や。やっぱり、ササキリや」と大きな声で言うと、A児「それや、それや」と賛成した。A児「先生、みんなに話していい」と、尋ねてきた。「教えてあげてね。バッタと思っていたけど違ったね。幼稚園にもいろいろな虫がいるんだね」と、二人の喜びに共感する。

虫の名前が分かった！友達に伝えたい！

<反省・評価>

捕まえた虫の名前が自分達の知っているバッタだと思っていたA児とB児だったが、保育者の言葉をきっかけに、図鑑で調べることで、同じイナゴやバッタでもいろいろな種類があり、名前も違うことに気づいた。また、保育者が調べる方法を提案したことから、より詳しく調べたいという思いが強くなった。そして、虫の名前や大きさなど、自分達で調べて分かったことで、今度は友達に伝えたいという思いへと繋がっていった。

子どもの心の動きは、その時によって変わる。その瞬間を見逃さずに援助することで自ら進んで遊ぶ姿へと繋がる。そのためには、保育者がどう援助や環境構成をするかが大切だと感じた。

【事例3】5歳児 「若草山をつくろう」(11月) 【みんなで一緒に作りたい】

- (○ねらい 環境構成_____ 援助_____ 心が動く姿_____)
- 共通の目的に向かって相談したり、協力したりしながら友達と一緒に進める楽しさを味わう。
 - 自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら遊ぶことを楽しむ。

心が動く要因と
しての見取り

作品展に向けて、遠足が雨天のため、行かなかった若草山を『奈良のみんなが知っているものやから、若草山を作りたい』という思いから作ることにした。どんなふうに若草山を作るのか、クラス子ども達と話し合うことにした。

実際に登ったことがある子どもは2~3名しかいないため、イメージしにくい子も多く、話し合いが進まない。イメージしやすいように、遠足で行く予定だった若草山の写真を用意する。

それを見たA児が「若草山って大きな山から大きな山を作りたいな」B児「登れる山にしたい」と話した。

しかし、登ったことのないC児が「本当の山はどうなってるんやろう」と、疑問を友達に伝えた。「そうやね。行けなかったもんね。」と、C児の思いを受け止める。すると、行ったことのあるD児が、「本当の若草山、行ったことあるで。ずっと山に登っていくねん。たくさん階段とかあったりするねん。坂道とかもあるねんで。すごくしんどいねん」と、自分の体験したことを話す。「そうやね。階段もあるし、坂道もあるもんね。」と、D児の言葉を繰り返し話し、遠足に行く前に子どもたちと作った大きなパネルを出し、よりイメージが膨らむように、見せた。B児「あ〜先生、おむすびころりんロードあるって言ってたやん」というと、C児が「すごい坂のことやで。あったよ」と伝える。子どもたちのイメージがより膨らみ、若草山をどう作るかが決まった。

大きな登れる若草山
をつくりたい

作りたいけど、どんな山か分からない

経験したことを伝えたい

大きいだけでなく
実際の若草山のよ
うに、坂道や階段
もある若草山にし
たい

<反省・評価>

実際に経験したことのない中で、若草山をイメージして話し合うことは難しかった。しかし、遠足前に子ども達と登山の見通しをもつために作った大きな段ボールのパネルを準備したことや、D児の経験した話を聞いたことから、子どもたちのイメージが膨らみ、クラス全体で共通のイメージをもつことができた。

子どもたちの思いが繋がるために、パネルを準備したり、経験したD児の話を聞いたことで、“もっとこうしたい”という思いが膨らみ、子ども達同士の話し合いが進むきっかけとなった。

【事例4】4歳児 「どこでもまわるよ！」（2月） 【自分もやってみたい】

- (○ねらい 環境構成_____ 援助_____ 心が動く姿_____)
- 自分なりの目標をもって継続的に取り組む。
 - 友達と一緒に遊び方を考えたり、工夫したりする。

1月、お楽しみ会でもらった糸引きゴマで遊び始めた。できたという達成感を感じてほしいと思い、保育者が“コマ回しチャレンジカード”を作成すると繰り返し挑戦する姿が見られた。友達と同じように回ったり、どちらが長く回っているか比べたりすることが楽しくなってきた時、偶然反対向きにコマが回り「キノコみたい」と子どもたちがつぶやいたことから、反対向きに回ることをキノコマわりと命名した。また、回っているコマに糸を垂らして巻き込ませることを扇風機という技の名前に決めた。保育者は「いいこと考えたね。先生にもどうするのか教えて」と声を掛け、まわりの子ども達へも繋げていけるように働きかけた。その後、一人の子がプリンカップとコマの大きさがぴったりだと気づき、その中で回したことから、友達と一緒に積み木を高く積んだ上で回したり、廊下(コンクリート)で回したり、プラスチック容器を使ってコマコースを作って回したりするなど、いろいろなところで回すことを楽しんでいた。

心が動く要因として
の見取り

したことがない遊びに挑戦しできるように
なりたい

できるようになって嬉しい

友達と一緒に遊ぶと楽しい

いろいろな技を自分たちで考え、遊びをもっと面白くしたい

友達と一緒に試したい。いろいろな可能性に気づきやってみたい

〈反省・評価〉

1月から遊びはじめ、1ヶ月ほど遊びが継続した。友達と一緒に遊びながら偶然の発見で、遊びが楽しくなり、子ども達自身がコマの技の名前を考え出した。保育者は必要以上に声を掛けずに、子ども達の「今何が楽しいと思っているのか」をじっくりと観察しながら見守ることを心掛けた。さりげない声掛けをつづけることで、子ども達は「もっといろいろな技を考えたい」「いろいろなコースを試してみたい」と自分なりの目標が出てきたことで、興味を継続して遊び続けることができたのではないかと考える。

5. 研究の成果

- 子どもが園生活を過ごす中で心が動く姿を捉え要因を探っていった。子どもが、キラッと輝く姿とは、興味あることについて考えたり、目的をもって行動したり、やってみたいと感じ取り組んだりする姿だと分かった。
- 4歳児は初めての集団生活の中で、保育者や友達と共に園生活を楽しむ。その中で自分が嬉しい、自分でやりたいという瞬間に心が動き、「楽しい・嬉しい」という経験を積み重ねていく。5歳児は、友達との関わりが深まり、認め合い、思いを共有していく中で、心が動き、主体的に活動する姿に繋がっている。育ちの過程をふまえた環境構成や援助の在り方について検証、検討することができた。

6. 今後の課題

- 子どもが心を動かし、主体的に活動する姿とはどのような姿であるかについて引き続き、探りながら、子どもの姿を見取っていく必要がある。また、見取るだけでなく保育を振り返り、クラスの実態や子どもの発達の時期に合わせた環境構成や援助、保育内容の工夫に努め主題に迫っていきたい。